

体育・保健体育等に関する資料

学習指導要領改訂の視点

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

①「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」

各教科等に関する個別の知識や技能など。身体的技能や芸術表現のための技能等も含む。

②「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」

主体的・協働的に問題を発見し解決していくために必要な思考力・判断力・表現力等。

③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(人間性や学びに向かう力等)」

①や②の力が働く方向性を決定付ける情意や態度等に関わるもの。以下のようなものが含まれる。

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
- ・多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会作りに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関するもの。

何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの 学習評価の充実

何を学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた 教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

- ◆ グローバル社会において不可欠な英語の能力の強化(小学校高学年での教科化等)や、我が国の伝統的な文化に関する教育の充実
- ◆ 国家・社会の責任ある形成者として、また、自立した人間として生きる力の育成に向けた高等学校教育の改善(地理歴史科における「地理総合」「歴史総合」、公民科における「公共」の設置等、新たな共通必修教科目の設置や科目構成の見直しなど抜本的な検討を行う。) 等

どのように学ぶか

アクティブ・ラーニングの観点からの 不断の授業改善

- ◆ 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

主体性・多様性・協働性
学びに向かう力
人間性 など

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

どのように学ぶか
(アクティブ・ラーニングの視点から
の不断の授業改善)

学習評価の充実
カリキュラム・マネジメントの充実

何を知っているか
何ができるか

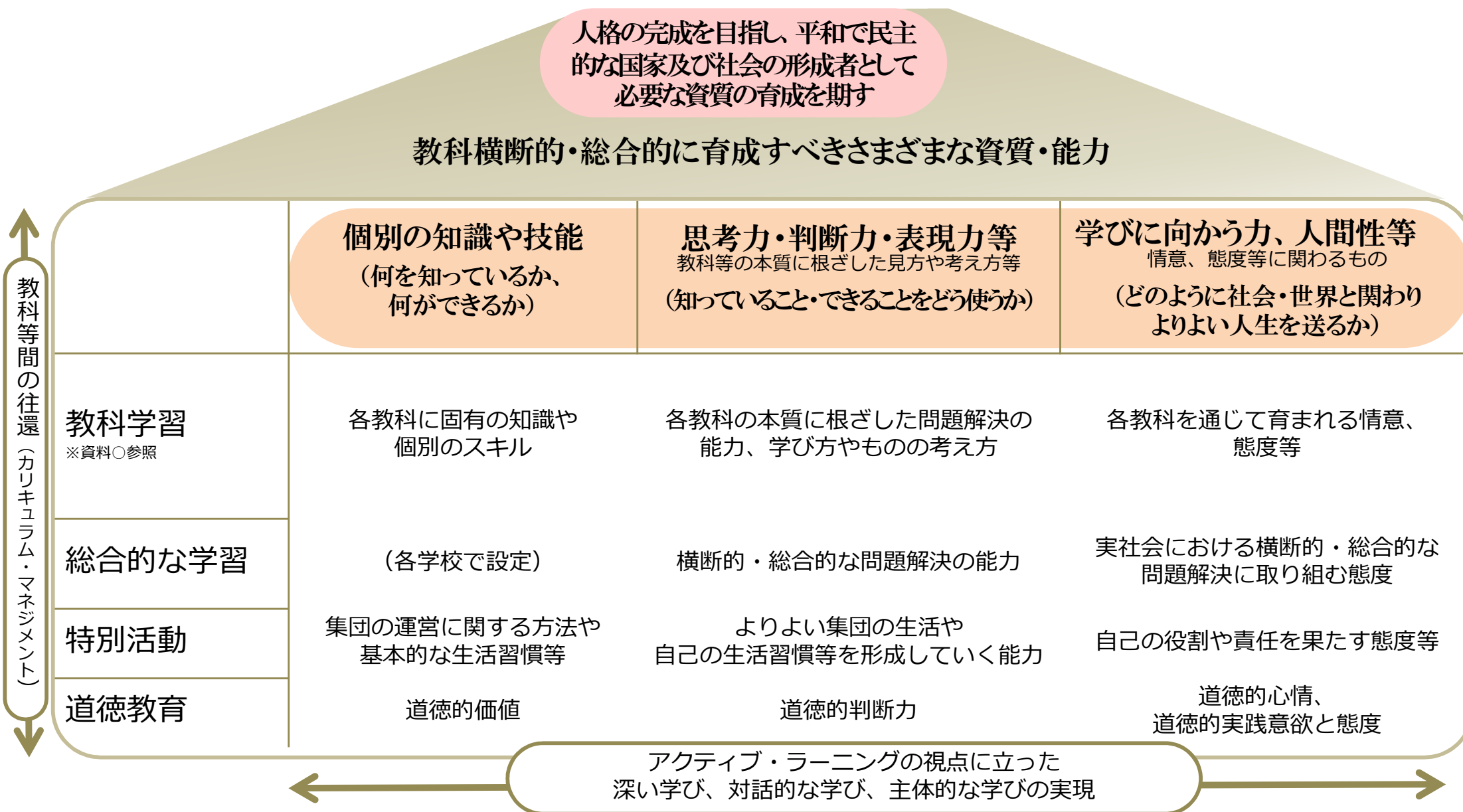
個別の知識・技能

知っていること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

学習指導要領等の構造化のイメージ（仮案・調整中）

下記のような構造をイメージしながら、各教科等の意義や教科・科目等の構成、各教科・科目等の内容を見直す必要があるのではないか。その際、教える側の視点だけではなく学習する側の視点にも立ち、学習プロセスの在り方や身に付ける資質・能力等について整理していく必要があるのではないかな。



体育・保健体育の課題

【体育】

○子供の体力に関する状況

- ・子供の体力について、昭和60年頃と比較すると低い状況にあること
- ・運動する子供としない子供の二極化傾向が続いていること

○豊かなスポーツライフを実現する資質や能力の育成

- ・「する、みる、支える」などの多様なスポーツとの関わり方を楽しむことができる資質や能力を育成すること
- ・運動への関心や意欲等を高め、技能や知識、思考力・判断力等、公正・協力・責任・参画等の態度をバランスよく育む指導を充実すること
- ・体力や生活に応じて自己の運動課題の見直しを図り、学習したことを実生活や実社会で生かし、運動の習慣化につなげるとともに体力の向上を図ることのできる能力を育成すること
- ・学校において子供が運動に取り組む時間を適切に確保すること

【保健】

○生涯にわたって健康を保持増進する実践力の育成

- ・健康に関する関心を高め、健康の保持増進を目指して主体的、協働的に取り組む学習が不十分
- ・健康情報を分析し、健康課題の解決や自他の生活の改善に活用する学習が不十分

○現代的な健康課題の解決に役立つ内容の充実

- ・少子高齢化や疾病構造の変化による現代的な健康課題の解決に役立つ内容が不十分である可能性
- ・心身の健康の保持増進とスポーツとの関連に課題

高等学校 科目「体育」の今後の在り方について（検討素案）

改善の視点(案)

- ・生徒の体力の低下傾向，運動する子供としない子供の二極化，興味・関心等の多様化，生活習慣の乱れ等の現状を踏まえ，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成すること
- ・学習したことを実生活や実社会で生かし、運動の習慣化につなげること
- ・体力の向上を重視した「体づくり運動」等の指導を更に充実すること
- ・意欲、思考力・判断力、運動の技能の源となる「知識」の指導を更に充実すること（オリンピック・パラリンピックの意義・価値等）
- ・指導と評価の一体化に向けた、技能や知識、思考力・判断力等、公正・協力・責任・参画等の態度をバランスよく育む指導を更に充実すること
- ・「する、みる、支える」などの多様なスポーツとの関わり方を推進すること

検討の方向性(案)

- 心と体を一体としてとらえ，心身の調和的発達を図ることができる資質や能力の育成
- 「する，みる，支える」などの視点から，自己に適した関わり方で、卒業後も運動やスポーツに親しむことができる資質や能力の育成
- 体力や生活の状況に応じて、自己の課題の見直しを図り、運動の習慣化につなげるとともに体力の向上を図ることができる能力の育成
- 公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、健康・安全を確保することができる能力の育成
- 領域の特性に応じて、技能や知識、思考力・判断力等、公正・協力・責任・参画等の態度をバランスよく育むための内容の充実
- 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、運動やスポーツへの関心・意欲等を高めるとともに、他教科等における学習とも連携しながら、大会の成果を未来への遺産として子供たちの中に根付かせていくための学びの充実
- 指導と評価の一体化を充実するための内容及び内容の取扱いの改善
- 実生活、実社会で生かすことを重視し、主体的・協働的に学ぶための内容の取扱い（指導方法）の工夫
- インクルーシブ教育システムの理念を踏まえた内容の取扱い(指導方法)の工夫
- スポーツの推進者を育成するための専門学科「体育」及び「学校設定科目」等の改善

生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成

高等学校 科目「保健」の今後の在り方について（検討素案）

改善の視点（案）

〔保健の課題〕

- ・実生活や他教科等で活用できる汎用的なスキルを育成する必要がある。
- ・依然として講義を中心とした知識の伝達型授業が多い。

〔学習方法や資質・能力に関する課題〕

- ・自他の健康課題を発見し、習得した知識を活用して課題解決する学習を取り入れることが必要。
- ・生徒の論理的な思考力（特に健康課題の解決方法を根拠に基づいて評価し、目的に応じて活用する力）に課題がある。
- ・生徒の健康に関する関心・意欲・態度に課題がある。
- ・生徒のコミュニケーション能力の育成に課題がある。
- ・危険予測や回避する能力、危険行動の抑制に課題がある。

〔保健に関する内容の課題〕

- ・少子高齢化や疾病構造の変化による現代的な健康課題の解決に役立つ内容が不十分である可能性。
例 高齢化に対応した健康寿命の延伸
少子化に対応した妊娠・出産等の課題
がんや精神疾患など
- ・自他の生命を守るための安全・安心に係る内容に課題
- ・心身の健康の保持増進とスポーツとの関連に課題

保健の育成する資質・能力

個人及び社会生活における健康・安全について理解を深め、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる。

社会生活を含めた総合的な健康の概念の理解

生涯にわたって健康課題に直面した際に、課題解決を目指して論理的に考え、意志決定・行動選択する力

健康・安全な社会づくりを目指して、他者とコミュニケーションし、健康的な環境づくりに参画する力

健康に関心をもち、自己の健康に関する取組を肯定的に捉えたり、レジリエンスを強化したりする力

検討の方向性（案）

科目「保健」の在り方

健康の保持増進のための総合的な実践力を育成する科目

健康に関心をもち、主体的、協働的に健康の保持増進に取り組む力を育成するとともに、健康・安全な社会づくりに参画する態度を育成すること

現代的な健康に関する課題解決的な学習を展開し、健康に関する思考力、判断力、表現力を養うとともに、それらを自分の生活に生かしたり社会生活に役立てたりする力を育成すること

保健と体育をより一層関連させるため、健康とスポーツの関係を踏まえた内容や資質・能力を検討

生涯を通じて自らの健康を適切に管理し
改善していく資質や能力の育成

高等学校

個人及び社会生活における
健康・安全に関する内容

入学年次, 次の年次で2単位
(1)現代社会と健康
(2)生涯を通じる健康
(3)社会生活と健康

より総合的に
考え、理解する

中学校

個人生活における健康・
安全に関する内容

1～3年で48時間程度
(1)心身の機能の発達と心の健康
(2)健康と環境
(3)傷害の防止
(4)健康な生活と疾病の予防

より科学的に考
え、理解する

小学校

身近な生活に
おける健康・安
全に関する基
礎的な内容

3, 4年 8時間程度
(1)毎日の生活と健康
(2)育ちゆく体とわたし
5, 6年 16時間程度
(1)心の健康
(2)けがの防止
(3)病気の予防

より実践的に
考え、理解する

学びの方向性

配当時間と大項目

発達の段階を踏まえた指導内容の体系化

就学前（幼児期）から多様な運動遊びを推進

系統性

豊かなスポーツライフ

小学校			中学校		高等学校		
1, 2年	3, 4年	5, 6年	1, 2年	3年	入学年次	次の年次	それ以降
各種の運動の基礎を培う時期			多くの領域の学習を経験する時期		卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期		
体づくり運動		体づくり運動		体づくり運動			
器械・器具を使った運動遊び	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	
走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動	陸上運動	陸上運動	陸上運動	陸上運動	
水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳	水泳	水泳	水泳	水泳	
表現・リズム遊び	表現運動	表現運動	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	
ゲーム	ゲーム	ボール運動	球技	球技	球技	球技	
			武道	武道	武道	武道	
			体育理論		体育理論		
	保健領域		保健分野		科目保健		

幼児教育に関する現状について

乳幼児期における多様な教育・保育の制度

幼稚園(幼稚園教育要領)

学校

幼保連携型認定こども園

(幼保連携型認定こども園教育・保育要領)

学校

保育所(保育所保育指針)

児童福祉施設

※認定こども園は、幼保連携型認定こども園のほか、幼稚園型認定こども園、保育所型認定こども園、地方裁量型認定こども園がある。

平成27年度より、幼稚園・保育所・認定こども園等の特性を生かした良質かつ適切な教育・保育、子育て支援を総合的に提供する体制を整備することを目的とした「子ども・子育て支援新制度」がスタート。

幼小接続の現状

【平成26年度幼児教育実態調査(文部科学省)】

○小学校の児童と交流を行った幼稚園は、全体の76.9%

○小学校の教員と交流を行った幼稚園は、全体の72.1%

○幼小接続において、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われていない市町村 77.0%

○平成26年度当初の異動発令による人事交流(県費負担小学校教員と市町村費負担幼稚園教員の人事交流、市町村費負担小学校教員と市町村費負担幼稚園教員の人事交流)を行った地方公共団体 2.0%

幼児期におけるいわゆる「非認知的能力」の重要性

【第1回幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書(ベネッセ次世代育成研究所, 2013)】

学びに向かう力の育ちと、文字・数・思考の育ちには関連がみられる

※本調査では、「学びに向かう力」とは、自分の気持ちを言う、相手の意見を聞く、物事に挑戦するなど、自己主張・自己抑制・協調性・好奇心などに関係する力としている。

幼稚園における子育ての支援の現状

【平成26年度幼児教育実態調査(文部科学省)】

○子育て支援活動を実施している幼稚園は、全体の86.7%

【第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書 ベネッセ教育総合研究所 2013年度】

○乳幼児がいる家庭全体に対して、充実させる必要性のある支援

・子育てについて気軽に相談できる場や機会の提供 51.1%の園がとても感じる 42.1%の園がまあ感じると回答

・保護者が乳幼児の発達やかかわり方について理解を深める情報提供 50.9%の園がとても感じる。40.4%の園がまあ感じると回答

第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

第1 指導計画の作成に当たっての留意事項

1 一般的な留意事項

- (9) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

2 特に留意する事項

- (5) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）における幼稚園教育との連携に係る主な規定

小学校

第1章 総則 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2（12）学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間、**幼稚園や保育所**、中学校及び特別支援学校など**との間の連携や交流を図る**とともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。

第2章 各教科 第5節 生活 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1（3）国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。**特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。**

第2章 各教科

第1節 国語

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1（6）低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、**幼稚園教育における言葉に関する内容などとの関連を考慮すること。**

第2章 各教科

第6節 音楽

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1（4）低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、**幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。**

第2章 各教科

第7節 図画工作

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1（5）低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、**幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。**

他の教科

道徳

外国語活動

総合的な学習の時間

特別活動

小学校におけるスタートカリキュラムについて

スタートカリキュラムとは

小学校へ入学した子供が、**幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として**、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム

(参考) 小学校学習指導要領解説 生活編

例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる。こうした単元では、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めていくことが可能となる。大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である。

幼児期 学びの芽生え

- ・楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく。
- ・遊びを中心として、頭も心も体も動かして様々な対象と直接関わりながら、総合的に学んでいく。
- ・日常生活の中で、様々な言葉や非言語によるコミュニケーションによって他者と関わり合う。

スタートカリキュラム

自立
成長
安心

児童期 自覚的な学び

- ・学ぶことについての意識があり、集中する時間とそうでない時間(休憩の時間等)の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいく。
- ・各教科等の学習内容について授業を通して学んでいく。
- ・主に授業の中で、話したり聞いたり、読んだり書いたり、一緒に活動したりすることで他者と関わり合う。

幼児教育

- ・5領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)を総合的に学んでいく教育課程等
- ・子供の生活リズムに合わせた1日の流れ
- ・身の回りの「人・もの・こと」が教材
- ・総合的に学んでいくために工夫された環境構成 等

小学校教育

- ・各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程
- ・時間割に沿った1日の流れ
- ・教科書が主たる教材
- ・系統的に学ぶために工夫された学習環境 等

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(平成22年11月)のポイント

＜幼小接続の課題＞(文部科学省調査より)

- ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識(都道府県100%、市町村99%)。
- その一方、幼小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況(都道府県77%、市町村80%が未実施)。
- その理由…「接続関係を具体的にすることが難しい」(52%)、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」(34%)、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」(23%)

(報告のポイント)

①幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方を示す

- 教育基本法や学校教育法において、幼小の教育の目的・目標(知・徳・体)は連続性・一貫性をもって構成。
- 幼小接続を体系的に理解するため、幼小接続の構造を「3段階構造」(教育の目的・目標⇒教育課程⇒教育活動)で捉える。
- 幼小の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という一つのつながりとして捉える。
- 幼児期の教育と小学校教育では、互いの教育を理解し、見通すことが必要。(その際、幼児期の教育と小学校教育は、それぞれ発達の違いを踏まえて教育を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意。)

②幼児期と児童期の教育活動をつながりて捉える工夫を示す

- 幼小を通した学びの基礎力の育成を図るため、
 - ・ 幼児期の終わりから児童期(低学年)にかけては「三つの自立」(学びの自立、生活上の自立、精神的な自立)を育成。
 - ・ 上記に加え、児童期においては、「学力の三つの要素」(「基礎的な知識・技能」、「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」)を育成。
- 学びの芽生えの時期(幼児期)、自覚的な学びの時期(児童期)という発達の段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通した学習という違いがあるものの、「人とのかかわり」や「ものとのかかわり」という直接的・具体的な対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して円滑な移行を図ることが必要。

「人とのかかわり」における留意点

＜幼児期の終わり＞

- 幼児の興味・関心や生活、協同性の育ち等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いを付けたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進めることが必要。

「ものとのかかわり」における留意点

＜幼児期の終わり＞

- 幼児の興味・関心や生活等の状況を踏まえて教職員が方向付けた課題について、発達の個人差に十分配慮しつつ、これまでの生活や体験の中で感得した法則性、言葉や文字、数量的な関係などを組み合わせて課題を解決したり、場面に応じて適切に使ったりすることについて、クラスやグループみんなで経験できる活動を計画的に進めることが必要。

- 小学校入学時に幼児期の教育との接続を意識したスタートカリキュラムの編成の留意点を示す。
(幼稚園・保育所・認定こども園との連携協力(子供の実態や指導の在り方等について理解を深める等)、授業時間や学習空間などの環境構成等の工夫(15分程度のモジュールによる時間割の構成等)など)
- 幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間を「接続期」というつながりとして捉える考え方の普及を図る。
(幼児期の年長から児童期(低学年)の期間における子供の発達や学びの連続性を踏まえて接続期を捉えることが必要。なお、接続期の実際の始期・終期は各学校・施設において適切な期間を設定。)

③幼小接続の取組を進めるための方策(連携・接続の体制づくり等)を示す

- 幼小接続の取組を進めるための方策として、幼小接続のための連携・接続の体制づくり、教職員の資質向上(研修体制の確立)、家庭や地域社会との連携・協力についてのポイントを示す。

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）

幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿（参考例）

（イ）健康な心と体

- （例）・体を動かす様々な活動に目標をもって挑戦したり、困難なことにつまずいても気持ちを切り替えて乗り越えようとしたりして、主体的に取り組む。
- ・いろいろな遊びの場面に応じて、体の諸部位を十分に動かす。
 - ・健康な生活リズムを通して、自分の健康に対する関心や安全についての構えを身に付け、自分の体を大切にする気持ちをもつ。
 - ・衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動の必要性に気付き、自分でする。
 - ・集団での生活の流れなどを予測して、準備や片付けも含め、自分たちの活動に、見通しをもって取り組む。

（ロ）自立心

- （例）・生活の流れを予測したり、周りの状況を感じたりして、自分でしなければならないことを自覚して行う。
- ・自分のことは自分で行い、自分でできないことは教職員や友達の助けを借りて、自分で行う。
 - ・いろいろな活動や遊びにおいて自分の力で最後までやり遂げ、満足感や達成感をもつ。

（ハ）協同性

- （例）・いろいろな友達と積極的にかかわり、友達の思いや考えなどを感じながら行動する。
- ・相手に分かるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いの出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながら、わかり合う。
 - ・クラスの様々な仲間とかかわりを通じて互いのよさをわかり合い、楽しみながら一緒に遊びを進めていく。
 - ・クラスみんなで共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、実現に向けて力を発揮しやり遂げる。

（二）道徳性の芽生え

- （例）・相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いこととの区別などを考えて行動する。
- ・友達や周りの人の気持ちを理解し、思いやりをもって接する。
 - ・他者の気持ちに共感したり、相手の立場から自分の行動を振り返ったりする経験を通して、相手の気持ちを大切に考えながら行動する。

（ホ）規範意識の芽生え

- （例）・クラスの間々と心地よく過ごしたり、より遊びを楽しくするためのきまりがあることが分かり、守ろうとする。
- ・みんなで使うものに愛着をもち、大事に扱う。
 - ・友達と折り合いをつけ、自分の気持ちを調整する。

（ヘ）いろいろな人とのかかわり

- （例）・小学生・中学生、地域の様々な人々に、自分からも親しみの気持ちを持って接する。
- ・親や祖父母など家族を大切にしようとする気持ちをもつ。
 - ・関係の深い人々との触れ合いの中で、自分が役に立つ喜びを感じる。
 - ・四季折々の地域の伝統的な行事に触れ、自分たちの住む地域に一層親しみを感じる。

(ト) 思考力の芽生え

- (例)・物との多様なかかわりの中で、物の性質や仕組みについて考えたり、気付いたりする。
- ・身近な物や用具などの特性や仕組みを生かしたり、いろいろな予想をしたりし、楽しみながら工夫して使う。

(チ) 自然とのかかわり

- (例)・自然に出会い、感動する体験を通じて、自然の大きさや不思議さを感じ、畏敬の念をもつ。
- ・水や氷、日向や日陰など、同じものでも季節により変化するものがあることを感じ取ったり、変化に応じて生活や遊びを変えたりする。
 - ・季節の草花や木の実などの自然の素材や、風、氷などの自然現象を遊びに取り入れたり、自然の不思議さをいろいろな方法で確かめたりする。

(リ) 生命尊重、公共心等

- (例)・身近な動物の世話や植物の栽培を通じて、生きているものへの愛着を感じ、生命の営みの不思議さ、生命の尊さに気付き、感動したり、いたわったり、大切にしたりする。
- ・友達同士で目的に必要な情報を伝え合ったり、活用したりする。
 - ・公共の施設を訪問したり、利用したりして、自分にとって関係の深い場であることが分かる。
 - ・様々な行事を通じて国旗に親しむ。

(ヌ) 数量・図形、文字等への関心・感覚

- (例)・生活や遊びを通じて、自分たちに関係の深い数量、長短、広さや速さ、図形の特徴などに関心をもち、必要感をもって数えたり、比べたり、組み合わせたりする。
- ・文字や様々な標識が、生活や遊びの中で人と人をつなぐコミュニケーションの役割をもつことに気付き、読んだり、書いたり、使ったりする。

(ル) 言葉による伝え合い

- 例)・相手の話の内容を注意して聞いて分かったり、自分の思いや考えなどを相手に分かるように話したりするなどして、言葉を通して教職員や友達と心を通わせる。
- ・イメージや考えを言葉で表現しながら、遊びを通して文字の意味や役割を認識したり、記号としての文字を獲得する必要性を理解したりし、必要に応じて具体的な物と対応させて、文字を読んだり、書いたりする。
 - ・絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わうことを通して、その言葉のもつ意味の面白さを感じたり、その想像の世界を友達と共有し、言葉による表現を楽しんだりする。

(ヲ) 豊かな感性と表現

- (例)・生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにもちながら、楽しく表現する。
- ・生活や遊びを通して感じたことや考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったり、演じて遊んだりする。
 - ・友達同士で互いに表現し合うことで、様々な表現の面白さに気付いたり、友達と一緒に表現する過程を楽しんだりする。

小学校体育に関する学習指導要領改訂の経緯等について

改訂年	領域	領域構成	年間時間数																																																		
昭和52年	A 基本の運動 B ゲーム C 体操 D 器械運動 E 陸上運動 F 水泳 G ボール運動 H 表現運動 I 保健	<table><tr><td></td><td>1年</td><td>2年</td><td>3年</td><td>4年</td><td>5年</td><td>6年</td></tr><tr><td rowspan="6">領域</td><td colspan="4" rowspan="3">基本の運動</td><td colspan="2">体操</td></tr><tr><td colspan="2">器械運動</td></tr><tr><td colspan="2">陸上運動</td></tr><tr><td colspan="4" rowspan="2">ゲーム</td><td colspan="2">水泳</td></tr><tr><td colspan="2">ボール運動</td></tr><tr><td colspan="4">表現運動</td><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="4">—</td><td colspan="2">保健</td></tr></table>		1年	2年	3年	4年	5年	6年	領域	基本の運動				体操		器械運動		陸上運動		ゲーム				水泳		ボール運動		表現運動						—				保健		各学年105時間 (1年は102時間)												
	1年	2年	3年	4年	5年	6年																																															
領域	基本の運動				体操																																																
					器械運動																																																
					陸上運動																																																
	ゲーム				水泳																																																
					ボール運動																																																
	表現運動																																																				
—				保健																																																	
平成元年	A 基本の運動 B ゲーム C 体操 D 器械運動 E 陸上運動 F 水泳 G ボール運動 H 表現運動 I 保健	<table><tr><td></td><td colspan="2">1・2年</td><td colspan="2">3・4年</td><td colspan="2">5・6年</td></tr><tr><td rowspan="6">領域</td><td colspan="4" rowspan="3">基本の運動</td><td colspan="2">体操</td></tr><tr><td colspan="2">器械運動</td></tr><tr><td colspan="2">陸上運動</td></tr><tr><td colspan="4" rowspan="2">ゲーム</td><td colspan="2">水泳</td></tr><tr><td colspan="2">ボール運動</td></tr><tr><td colspan="4">表現運動</td><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="4">—</td><td colspan="2">保健</td></tr></table>		1・2年		3・4年		5・6年		領域	基本の運動				体操		器械運動		陸上運動		ゲーム				水泳		ボール運動		表現運動						—				保健		各学年105時間 (1年は102時間)												
	1・2年		3・4年		5・6年																																																
領域	基本の運動				体操																																																
					器械運動																																																
					陸上運動																																																
	ゲーム				水泳																																																
					ボール運動																																																
	表現運動																																																				
—				保健																																																	
平成10年	A 基本の運動 B ゲーム C 体づくり運動 D 器械運動 E 陸上運動 F 水泳 G ボール運動 H 表現運動 I 保健	<table><tr><td></td><td colspan="2">1・2年</td><td colspan="2">3・4年</td><td colspan="2">5・6年</td></tr><tr><td rowspan="6">領域</td><td colspan="4" rowspan="3">基本の運動</td><td colspan="2">体づくり運動</td></tr><tr><td colspan="2">器械運動</td></tr><tr><td colspan="2">陸上運動</td></tr><tr><td colspan="4" rowspan="2">ゲーム</td><td colspan="2">水泳</td></tr><tr><td colspan="2">ボール運動</td></tr><tr><td colspan="4">表現運動</td><td colspan="2"></td></tr><tr><td colspan="4">—</td><td colspan="2">保健</td></tr></table>		1・2年		3・4年		5・6年		領域	基本の運動				体づくり運動		器械運動		陸上運動		ゲーム				水泳		ボール運動		表現運動						—				保健		各学年90時間												
	1・2年		3・4年		5・6年																																																
領域	基本の運動				体づくり運動																																																
					器械運動																																																
					陸上運動																																																
	ゲーム				水泳																																																
					ボール運動																																																
	表現運動																																																				
—				保健																																																	
平成20年	A 体づくり運動 B 器械運動系 C 陸上運動系 D 水泳系 E ボール運動系 F 表現運動系 G 保健	<table><tr><td></td><td colspan="2">1・2年</td><td colspan="2">3・4年</td><td colspan="2">5・6年</td></tr><tr><td rowspan="7">領域</td><td colspan="5">体づくり運動</td><td></td></tr><tr><td colspan="2">器械・器具を使つての運動遊び</td><td colspan="3">器械運動</td><td></td></tr><tr><td colspan="2">走・跳の運動遊び</td><td colspan="2">走・跳の運動</td><td colspan="2">陸上運動</td></tr><tr><td colspan="2">水遊び</td><td colspan="2">浮く・泳ぐ運動</td><td colspan="2">水泳</td></tr><tr><td colspan="3">ゲーム</td><td colspan="3">ボール運動</td></tr><tr><td colspan="2">表現リズム遊び</td><td colspan="4">表現運動</td></tr><tr><td colspan="2">—</td><td colspan="4">保健</td></tr></table>		1・2年		3・4年		5・6年		領域	体づくり運動						器械・器具を使つての運動遊び		器械運動				走・跳の運動遊び		走・跳の運動		陸上運動		水遊び		浮く・泳ぐ運動		水泳		ゲーム			ボール運動			表現リズム遊び		表現運動				—		保健				1年：102時間 2～4年：105時間 5・6年：90時間
	1・2年		3・4年		5・6年																																																
領域	体づくり運動																																																				
	器械・器具を使つての運動遊び		器械運動																																																		
	走・跳の運動遊び		走・跳の運動		陸上運動																																																
	水遊び		浮く・泳ぐ運動		水泳																																																
	ゲーム			ボール運動																																																	
	表現リズム遊び		表現運動																																																		
	—		保健																																																		

中学校保健体育に関する学習指導要領改訂の経緯等について

改訂年	領域	領域構成	年間時間数																																								
昭和52年	A 体操 B 個人的スポーツ C 集団的スポーツ D 格技 E ダンス F 体育に関する知識 保健	<table border="1"> <tr> <th></th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th></tr> <tr> <td rowspan="6">領域</td><td colspan="3">体操</td></tr> <tr> <td colspan="3">個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)</td></tr> <tr> <td colspan="3">集団的スポーツ</td></tr> <tr> <td colspan="3">格技(男子)</td></tr> <tr> <td colspan="3">ダンス(女子)</td></tr> <tr> <td colspan="2">体育に関する知識</td><td>—</td></tr> <tr> <td colspan="4">保健</td></tr> </table>		1年	2年	3年	領域	体操			個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)			集団的スポーツ			格技(男子)			ダンス(女子)			体育に関する知識		—	保健				保健体育として 各学年105時間 体育分野 3年間を通して260時間 保健分野 3年間を通して55時間													
	1年	2年	3年																																								
領域	体操																																										
	個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)																																										
	集団的スポーツ																																										
	格技(男子)																																										
	ダンス(女子)																																										
	体育に関する知識		—																																								
保健																																											
平成元年	A 体操 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育に関する知識 保健	<table border="1"> <tr> <th>領域</th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th></tr> <tr> <td>A 体操</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> <tr> <td>B 器械運動</td><td>必修</td><td>BCDから</td><td>BCDから</td></tr> <tr> <td>C 陸上競技</td><td>必修</td><td>②選択</td><td>①～② 選択</td></tr> <tr> <td>D 水泳</td><td>必修</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>E 球技</td><td>必修</td><td>EFGから</td><td>EFGから</td></tr> <tr> <td>F 武道</td><td>FGから</td><td>②選択</td><td>②選択</td></tr> <tr> <td>G ダンス</td><td>①選択</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>H 体育に関する知識</td><td>必修</td><td>必修</td><td>—</td></tr> <tr> <td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> </table>	領域	1年	2年	3年	A 体操	必修	必修	必修	B 器械運動	必修	BCDから	BCDから	C 陸上競技	必修	②選択	①～② 選択	D 水泳	必修			E 球技	必修	EFGから	EFGから	F 武道	FGから	②選択	②選択	G ダンス	①選択			H 体育に関する知識	必修	必修	—	保健	必修	必修	必修	保健体育として 1年:105時間 2年:105時間 3年:105～140時間 体育分野 3学年を通して260～295時間 保健分野 3学年を通して55時間
領域	1年	2年	3年																																								
A 体操	必修	必修	必修																																								
B 器械運動	必修	BCDから	BCDから																																								
C 陸上競技	必修	②選択	①～② 選択																																								
D 水泳	必修																																										
E 球技	必修	EFGから	EFGから																																								
F 武道	FGから	②選択	②選択																																								
G ダンス	①選択																																										
H 体育に関する知識	必修	必修	—																																								
保健	必修	必修	必修																																								
平成10年	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論 保健	<table border="1"> <tr> <th>領域</th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th></tr> <tr> <td>A 体づくり運動</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> <tr> <td>B 器械運動</td><td>必修</td><td>BCDから</td><td>BCDから</td></tr> <tr> <td>C 陸上競技</td><td>必修</td><td>①又は ②選択</td><td>①又は ②選択</td></tr> <tr> <td>D 水泳</td><td>必修</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>E 球技</td><td>必修</td><td>EFGから</td><td>EFGから</td></tr> <tr> <td>F 武道</td><td>FGから</td><td>②選択</td><td>②選択</td></tr> <tr> <td>G ダンス</td><td>選択</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>H 体育理論</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> <tr> <td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> </table>	領域	1年	2年	3年	A 体づくり運動	必修	必修	必修	B 器械運動	必修	BCDから	BCDから	C 陸上競技	必修	①又は ②選択	①又は ②選択	D 水泳	必修			E 球技	必修	EFGから	EFGから	F 武道	FGから	②選択	②選択	G ダンス	選択			H 体育理論	必修	必修	必修	保健	必修	必修	必修	保健体育として 各学年90時間 体育分野 3年間で222時間程度 保健分野 3年間で48時間程度
領域	1年	2年	3年																																								
A 体づくり運動	必修	必修	必修																																								
B 器械運動	必修	BCDから	BCDから																																								
C 陸上競技	必修	①又は ②選択	①又は ②選択																																								
D 水泳	必修																																										
E 球技	必修	EFGから	EFGから																																								
F 武道	FGから	②選択	②選択																																								
G ダンス	選択																																										
H 体育理論	必修	必修	必修																																								
保健	必修	必修	必修																																								
平成20年	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論	<table border="1"> <tr> <th>領域</th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th></tr> <tr> <td>A 体づくり運動</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> <tr> <td>B 器械運動</td><td>必修</td><td></td><td>BCDから①以上 選択</td></tr> <tr> <td>C 陸上競技</td><td>必修</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>D 水泳</td><td>必修</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>E 球技</td><td>必修</td><td></td><td>EFから①以上選択</td></tr> <tr> <td>F 武道</td><td>必修</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>G ダンス</td><td>必修</td><td></td><td>BCDから①以上選択</td></tr> <tr> <td>H 体育理論</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> <tr> <td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr> </table>	領域	1年	2年	3年	A 体づくり運動	必修	必修	必修	B 器械運動	必修		BCDから①以上 選択	C 陸上競技	必修			D 水泳	必修			E 球技	必修		EFから①以上選択	F 武道	必修			G ダンス	必修		BCDから①以上選択	H 体育理論	必修	必修	必修	保健	必修	必修	必修	保健体育として 各学年105時間 体育分野 3学年間で267時間程度 保健分野 3学年間で48時間程度
領域	1年	2年	3年																																								
A 体づくり運動	必修	必修	必修																																								
B 器械運動	必修		BCDから①以上 選択																																								
C 陸上競技	必修																																										
D 水泳	必修																																										
E 球技	必修		EFから①以上選択																																								
F 武道	必修																																										
G ダンス	必修		BCDから①以上選択																																								
H 体育理論	必修	必修	必修																																								
保健	必修	必修	必修																																								

高等学校保健体育に関する学習指導要領改訂の経緯等について

改訂年	領域	領域構成	単位数																														
昭和53年	A 体操 B 個人的スポーツ C 集団的スポーツ D 格技 E ダンス F 体育理論 保健	<table><tr><td></td><td>1年</td><td>2年</td><td>3年</td></tr><tr><td rowspan="6">領域</td><td colspan="3">体操</td></tr><tr><td colspan="3">個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)</td></tr><tr><td colspan="3">集団的スポーツ</td></tr><tr><td colspan="3">格技(主として男子)</td></tr><tr><td colspan="3">ダンス(主として女子)</td></tr><tr><td colspan="3">体育理論</td></tr><tr><td></td><td colspan="2">保健</td><td>—</td></tr></table>		1年	2年	3年	領域	体操			個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)			集団的スポーツ			格技(主として男子)			ダンス(主として女子)			体育理論				保健		—	体育 7～9単位 保健:2単位			
	1年	2年	3年																														
領域	体操																																
	個人的スポーツ(陸上競技・器械運動・水泳)																																
	集団的スポーツ																																
	格技(主として男子)																																
	ダンス(主として女子)																																
	体育理論																																
	保健		—																														
平成元年	A 体操 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論 保健	<table><tr><th>領域</th><th>1年</th><th>2年</th><th>3年</th></tr><tr><td>A 体操</td><td colspan="3">必修</td></tr><tr><td>B 器械運動</td><td colspan="3" rowspan="6">BCDEFGから③又は④を選択して履修。その際、F又はGのいずれかを含む。</td></tr><tr><td>C 陸上競技</td></tr><tr><td>D 水泳</td></tr><tr><td>E 球技</td></tr><tr><td>F 武道</td></tr><tr><td>G ダンス</td></tr><tr><td>H 体育理論</td><td colspan="3">必修</td></tr><tr><td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>—</td></tr></table>	領域	1年	2年	3年	A 体操	必修			B 器械運動	BCDEFGから③又は④を選択して履修。その際、F又はGのいずれかを含む。			C 陸上競技	D 水泳	E 球技	F 武道	G ダンス	H 体育理論	必修			保健	必修	必修	—	体育 7～9単位 保健:2単位					
領域	1年	2年	3年																														
A 体操	必修																																
B 器械運動	BCDEFGから③又は④を選択して履修。その際、F又はGのいずれかを含む。																																
C 陸上競技																																	
D 水泳																																	
E 球技																																	
F 武道																																	
G ダンス																																	
H 体育理論	必修																																
保健	必修	必修	—																														
平成11年	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論 保健	<table><tr><th>領域</th><th>入学年次</th><th>その次の年次</th><th>それ以降の年次</th></tr><tr><td>A 体づくり運動</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr><tr><td>B 器械運動</td><td colspan="2" rowspan="6">B,C,D,E,F及びGから③又は④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。</td><td>B,C,D,E,F及びGから②～④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。</td></tr><tr><td>C 陸上競技</td></tr><tr><td>D 水泳</td></tr><tr><td>E 球技</td></tr><tr><td>F 武道</td></tr><tr><td>G ダンス</td></tr><tr><td>H 体育理論</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr><tr><td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>—</td></tr></table>	領域	入学年次	その次の年次	それ以降の年次	A 体づくり運動	必修	必修	必修	B 器械運動	B,C,D,E,F及びGから③又は④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。		B,C,D,E,F及びGから②～④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。	C 陸上競技	D 水泳	E 球技	F 武道	G ダンス	H 体育理論	必修	必修	必修	保健	必修	必修	—	体育 7～8単位 保健:2単位					
領域	入学年次	その次の年次	それ以降の年次																														
A 体づくり運動	必修	必修	必修																														
B 器械運動	B,C,D,E,F及びGから③又は④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。		B,C,D,E,F及びGから②～④を選択。その際、F又はGのいずれかを含む。																														
C 陸上競技																																	
D 水泳																																	
E 球技																																	
F 武道																																	
G ダンス																																	
H 体育理論	必修	必修	必修																														
保健	必修	必修	—																														
平成21年	A 体づくり運動 B 器械運動 C 陸上競技 D 水泳 E 球技 F 武道 G ダンス H 体育理論 保健	<table><tr><th>領域</th><th>入学年次</th><th>その次の年次</th><th>それ以降の年次</th></tr><tr><td>A 体づくり運動</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr><tr><td>B 器械運動</td><td colspan="2" rowspan="4">BCDGから①以上選択</td><td rowspan="4">B,C,D,E,F,Gから②以上選択</td></tr><tr><td>C 陸上競技</td></tr><tr><td>D 水泳</td></tr><tr><td>E 球技</td></tr><tr><td>F 武道</td><td colspan="2">EFから①以上選択</td><td rowspan="2">B,C,D,E,F,Gから②以上選択</td></tr><tr><td>G ダンス</td><td colspan="2">BCDGから①以上選択</td></tr><tr><td>H 体育理論</td><td>必修</td><td>必修</td><td>必修</td></tr><tr><td>保健</td><td>必修</td><td>必修</td><td>—</td></tr></table>	領域	入学年次	その次の年次	それ以降の年次	A 体づくり運動	必修	必修	必修	B 器械運動	BCDGから①以上選択		B,C,D,E,F,Gから②以上選択	C 陸上競技	D 水泳	E 球技	F 武道	EFから①以上選択		B,C,D,E,F,Gから②以上選択	G ダンス	BCDGから①以上選択		H 体育理論	必修	必修	必修	保健	必修	必修	—	体育 7～8単位 保健:2単位
領域	入学年次	その次の年次	それ以降の年次																														
A 体づくり運動	必修	必修	必修																														
B 器械運動	BCDGから①以上選択		B,C,D,E,F,Gから②以上選択																														
C 陸上競技																																	
D 水泳																																	
E 球技																																	
F 武道	EFから①以上選択		B,C,D,E,F,Gから②以上選択																														
G ダンス	BCDGから①以上選択																																
H 体育理論	必修	必修	必修																														
保健	必修	必修	—																														

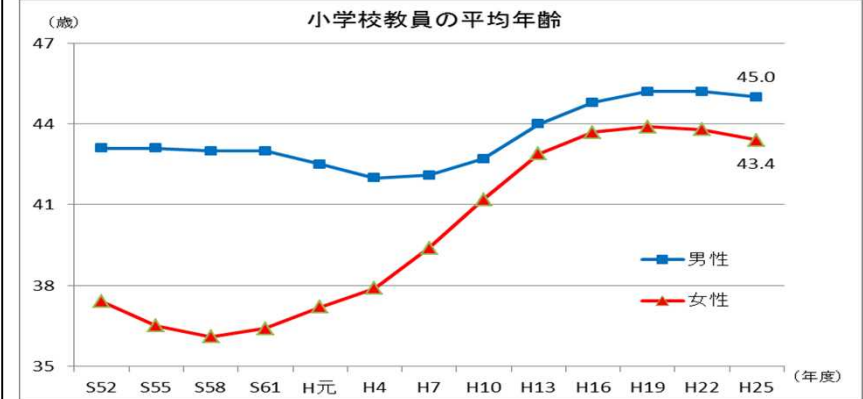
小学校における体育の指導体制について

- 小学校で常勤の体育専科教員を配置している学校の割合は3.38%である(平成25年度)。
- 小学校における教員の平均年齢は、男性教員で45.0歳、女性教員で43.4歳(平成25年度)である。
- 小学校で体育の指導を補助する外部指導員を配置している学校の割合は8.5%である(平成25年度)。

学校に体育専科教員は配置されているか

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人～
平成24年度常勤	19,556校	408校	116校	69校	16校	6校	7校	5校	1校	12校
	96.83%	2.02%	0.57%	0.34%	0.08%	0.03%	0.03%	0.02%	0.00%	0.06%
平成24年度非常勤	19,477校	255校	19校	2校	0校	3校	0校	1校	0校	0校
	98.58%	1.29%	0.10%	0.01%	0.00%	0.02%	0.00%	0.01%	0.00%	0.00%
平成25年度常勤	19,526校	448校	116校	63校	21校	12校	5校	2校	4校	12校
	96.62%	2.22%	0.57%	0.31%	0.10%	0.06%	0.02%	0.01%	0.02%	0.06%
平成25年度非常勤	19,493校	248校	20校	6校	0校	1校	3校	1校	0校	0校
	98.59%	1.25%	0.10%	0.03%	0.00%	0.01%	0.02%	0.01%	0.00%	0.00%

(出典)「全国体力・運動能力、運動習慣等調査(平成25年度)」



(出典)「学校教員統計調査」

学校に体育の指導を補助する外部指導員は配置されているか

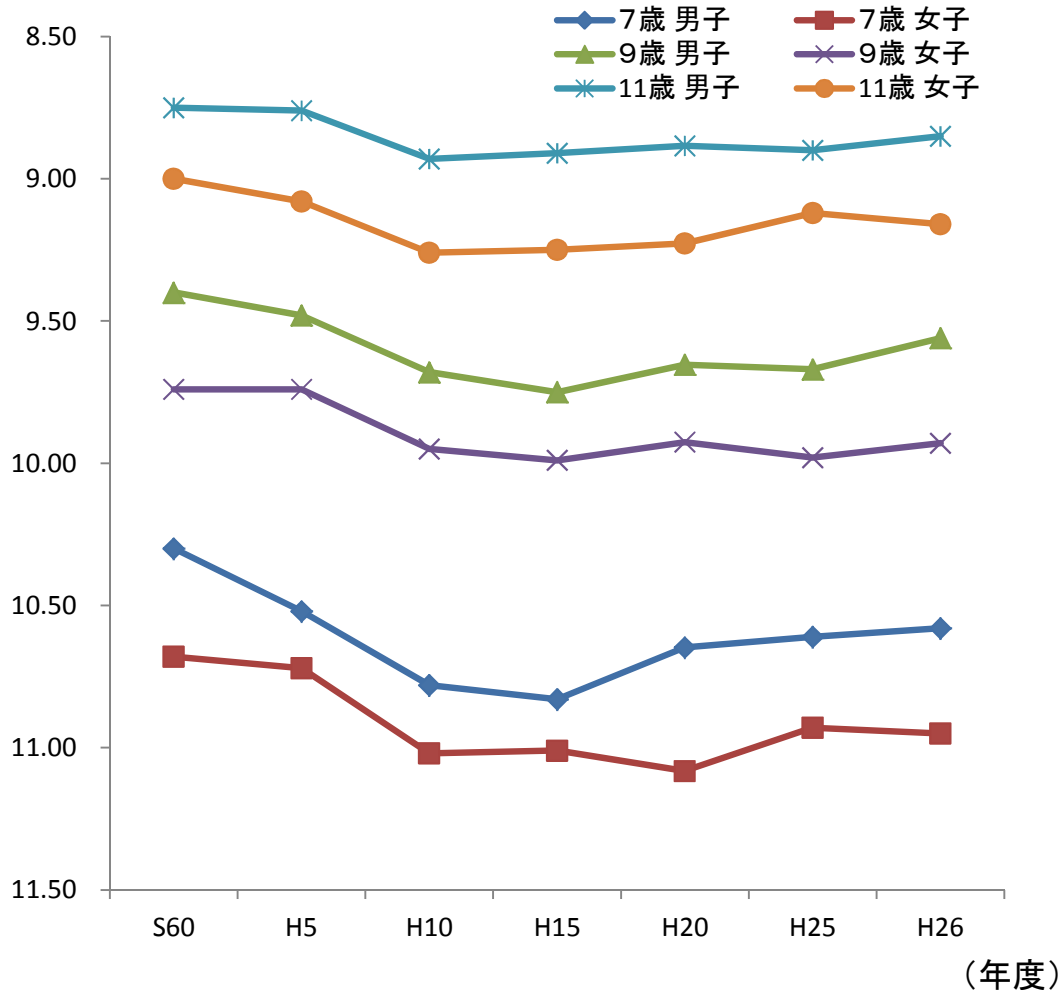
	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人～
平成24年度	18,441校	971校	282校	99校	35校	33校	27校	9校	10校	27校
	92.5%	4.9%	1.4%	0.5%	0.2%	0.2%	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%
平成25年度	18,285校	1,090校	345校	108校	43校	33校	31校	12校	10校	34校
	91.5%	5.5%	1.7%	0.5%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.2%

(出典)「全国体力・運動能力、運動習慣等調査(平成25年度)」

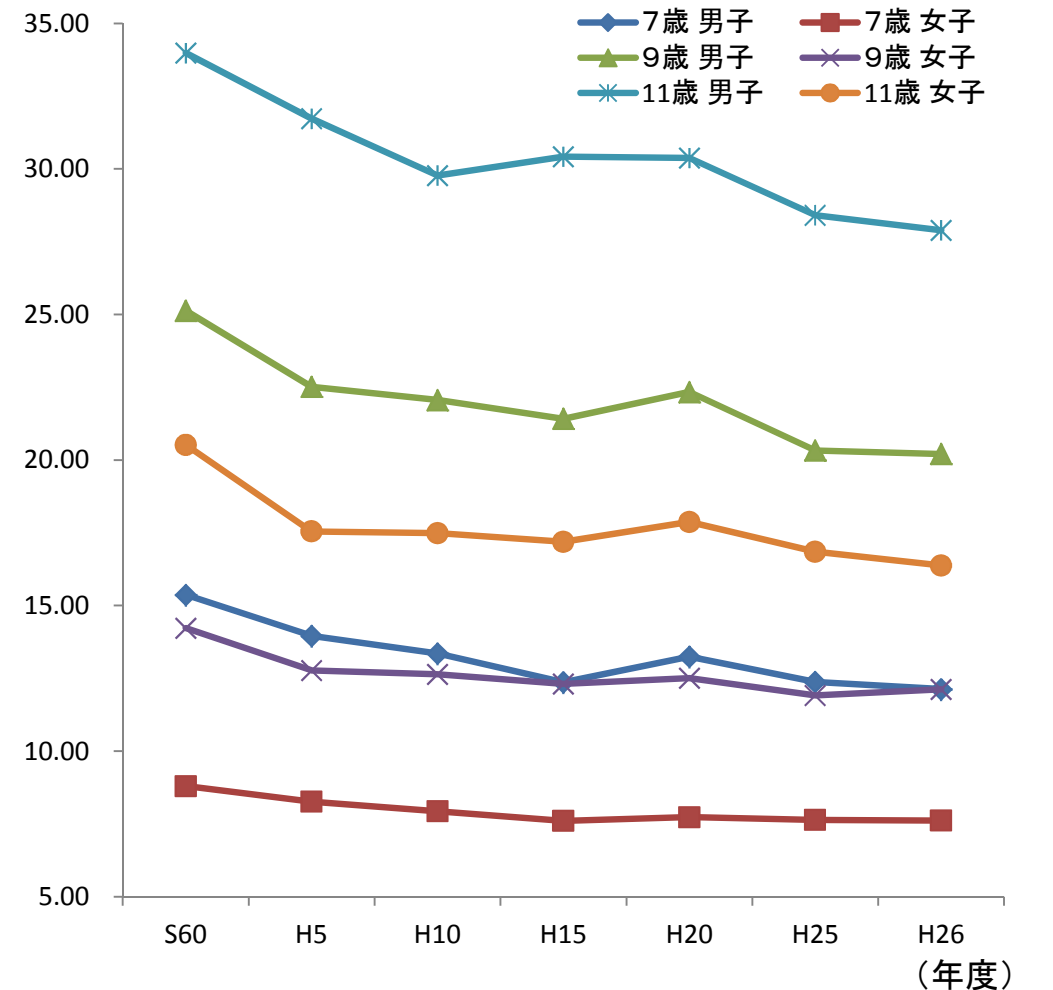
子供の体力・運動能力の年次推移

○平成26年度の調査結果と体力水準の高かった昭和60年頃を比較すると、依然として低い水準にとどまっている。
○平成10年度から平成26年度では、昭和60年以降の低下傾向に概ね歯止めがかかってきている。

50m走



ソフトボール投

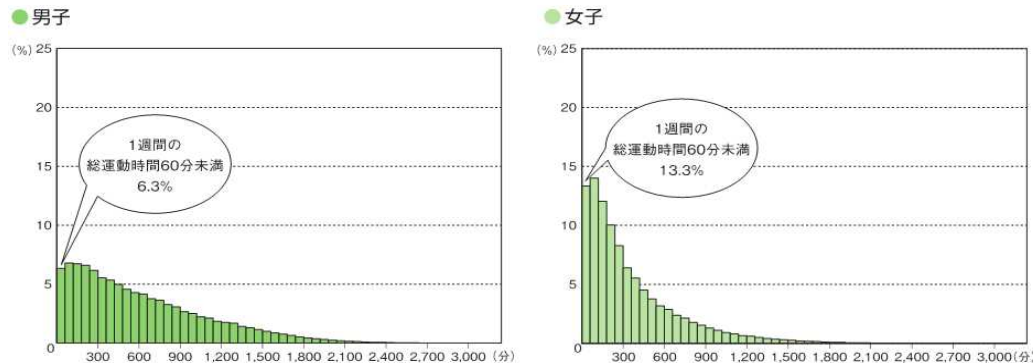


運動やスポーツの1週間の実施時間

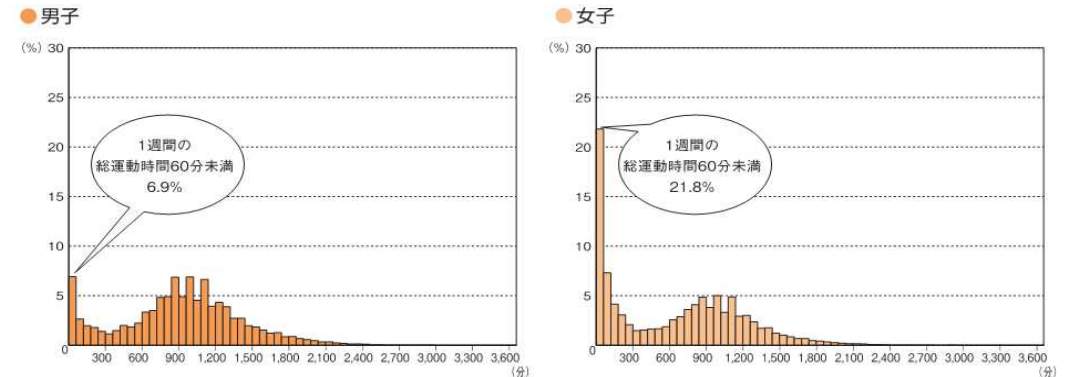
- 全国の小学校5年生と中学校2年生を対象とした調査で、1週間の総運動時間が60分未満の割合は、両学年の男子とも10%未満、小学生女子は13.3%、中学生女子は21.8%である。
- 両学年の男女とも、運動やスポーツの1週間の実施時間が長いほど体力合計点が高かった。

【運動・スポーツの1週間の実施時間】

(小学生)

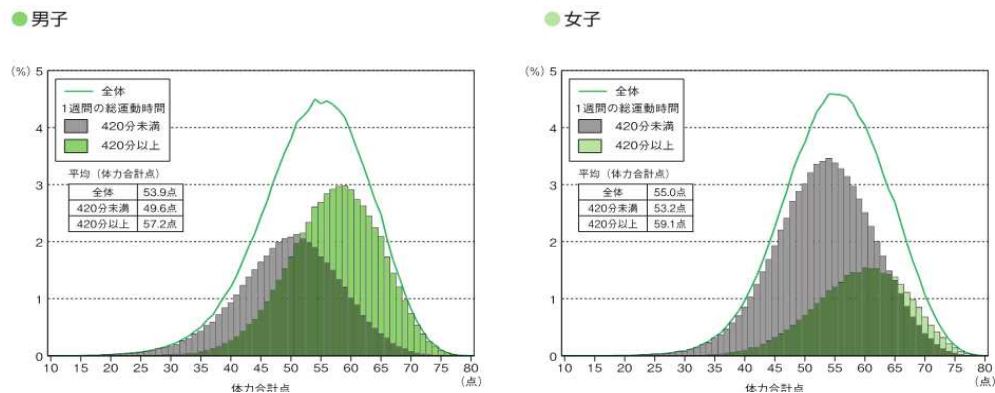


(中学生)

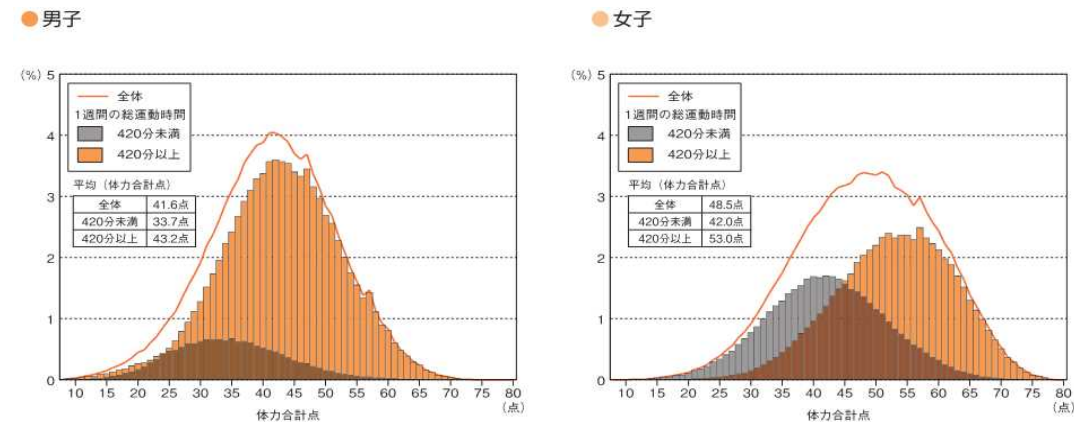


【運動やスポーツの1週間の実施時間と体力合計点との関連】

(小学生)



(中学生)



- (注)・全国の小学校5年生、中学校2年生において悉皆調査。
 ・テストの採点基準は男女及び小中学校で異なる。
 ・「ソフトボール投げ」と「ハンドボール投げ」のように小中学校で異なる種目がある。

(出典)平成26年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書

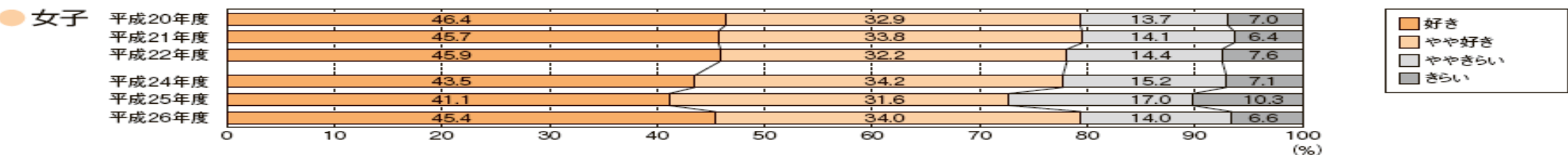
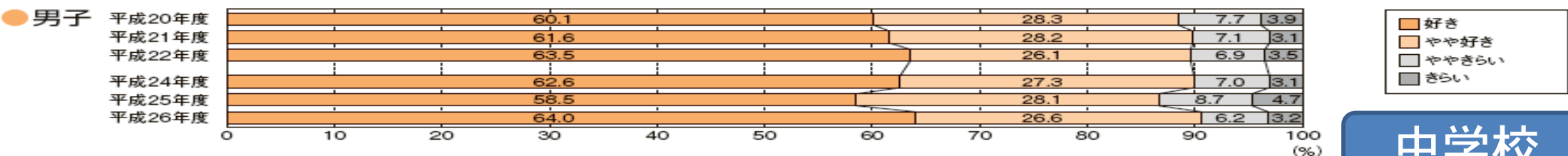
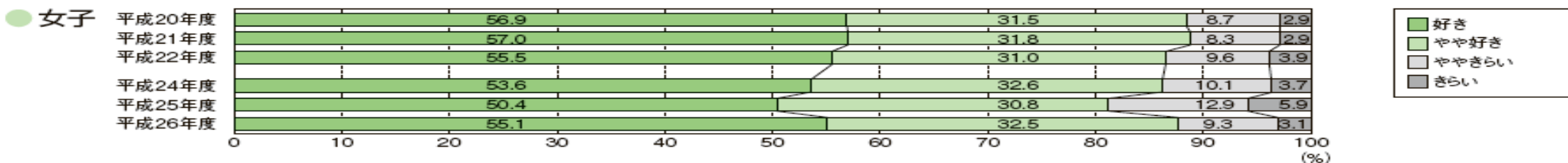
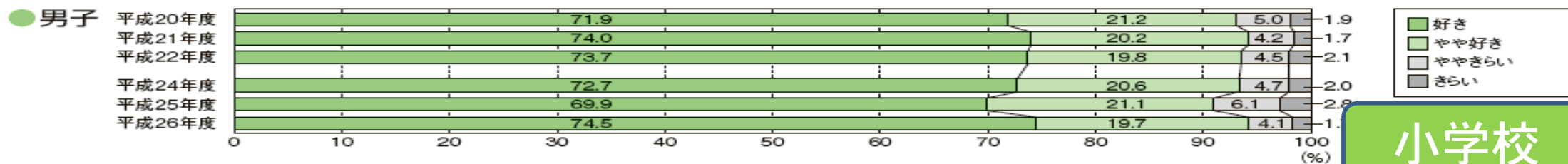
運動やスポーツに対する意識の変化

＜ 運動やスポーツの好き・きらいの推移 ＞

運動やスポーツの好き・きらいでは、小学校男女、中学校男女のすべてにおいて、昨年度と比較して、好きと回答した割合が高かった。

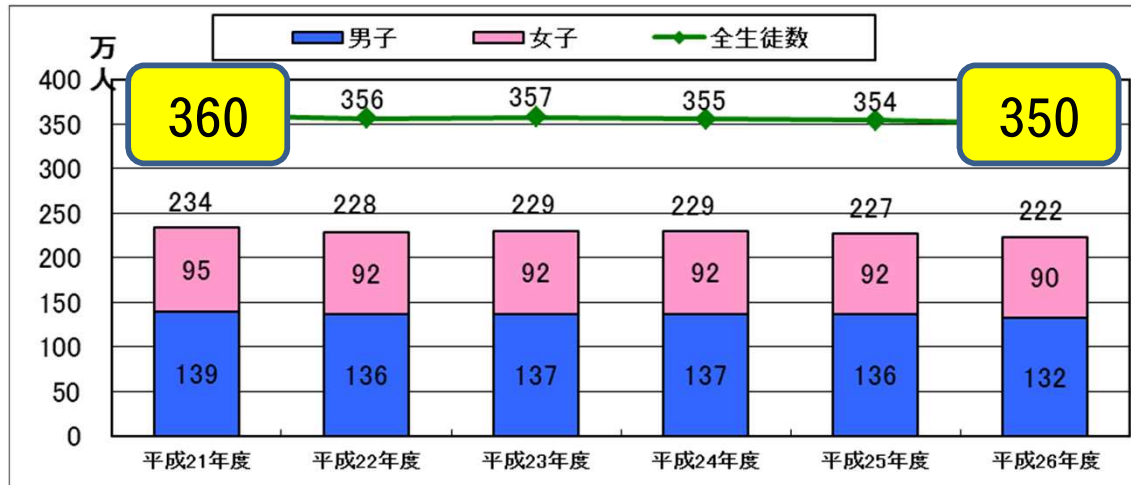
特に、小・中学校男子で、運動やスポーツが好きと回答した割合は、平成20年度以降で最も高かった。

た

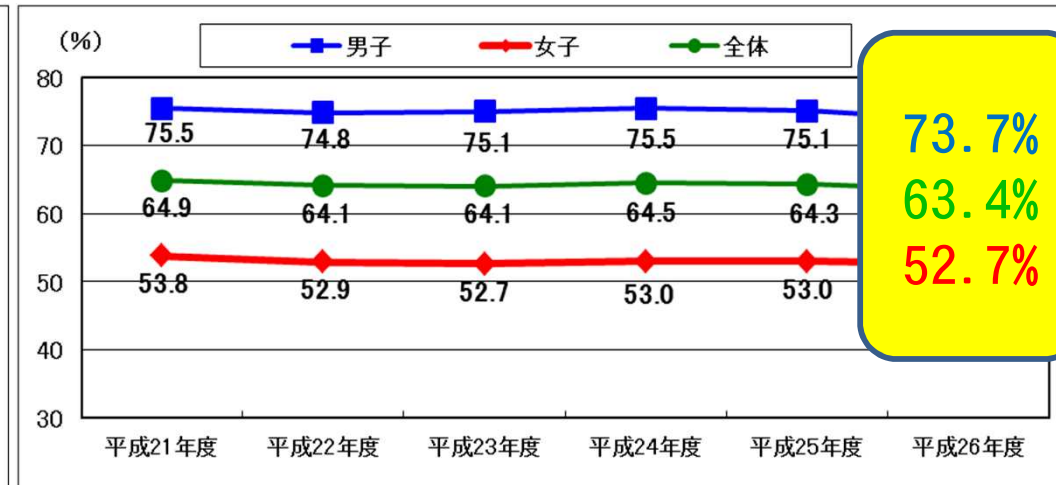


運動部活動の状況（参加生徒数・参加率の推移）

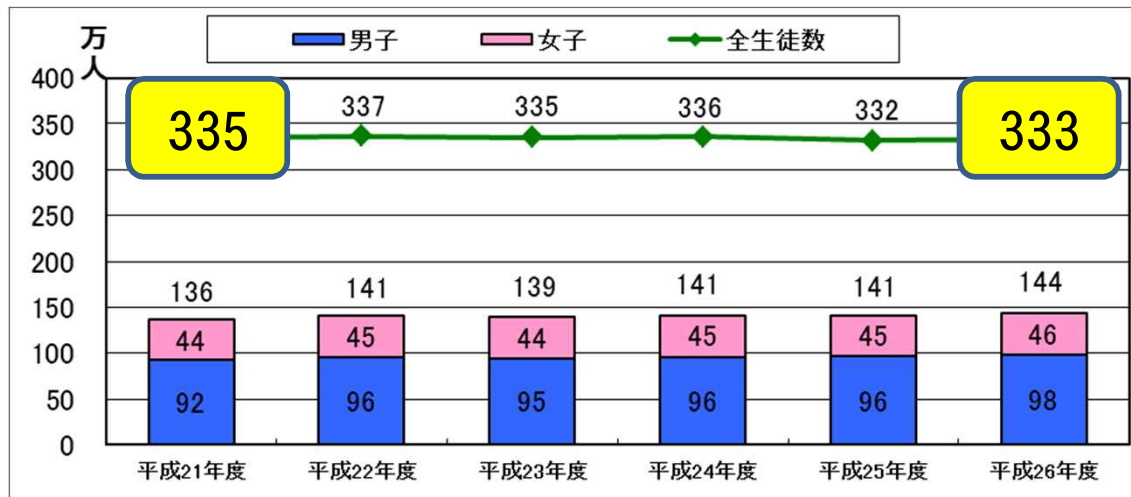
○中学校における運動部活動参加生徒数



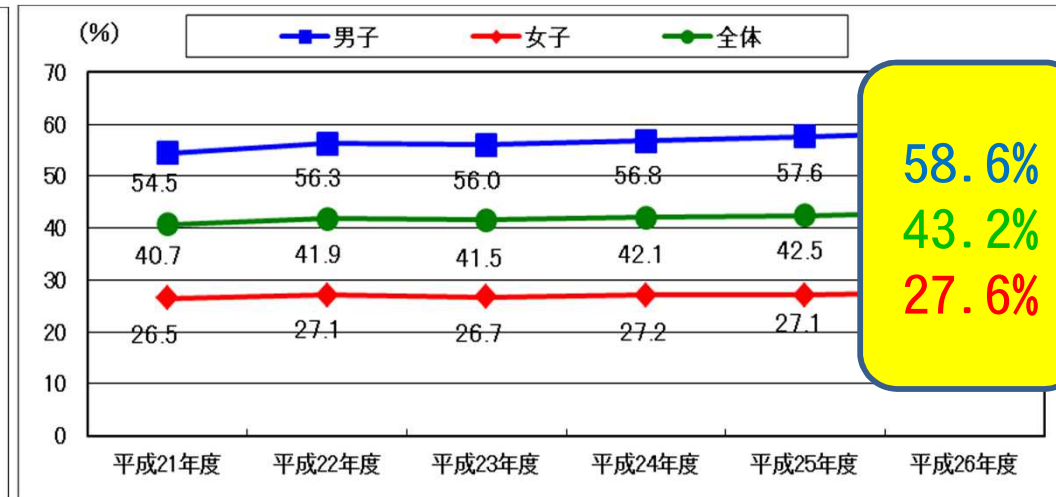
○中学校における運動部活動の参加率



○高等学校における運動部活動参加生徒数



○高等学校における運動部活動の参加率



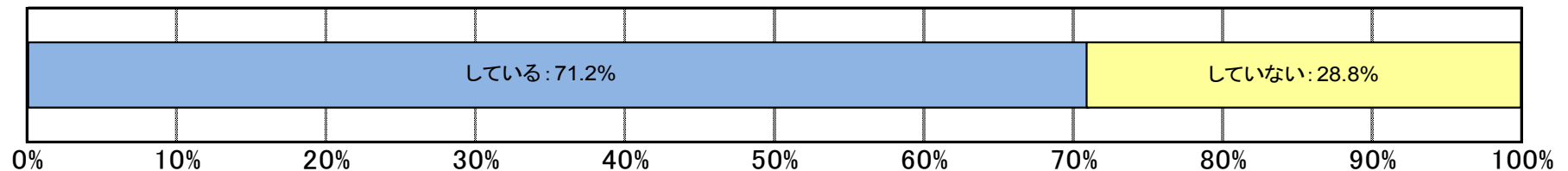
中学校：（公財）日本中体連調べ（全国中学校体育大会種目のみを合計）

高等学校：（公財）全国高体連及び（公財）日本高野連調べ（インターハイ種目及び硬式野球・軟式野球を合計）

外部人材の活用状況、総合運動部、複数校合同運動部活動の実施状況

- 運動部活動に外部指導者を活用している中学校の割合は、71.2%である。
- 小学校に比べ、中学校、高等学校は、児童生徒の多様なニーズに応えることができる総合運動部活動の実施状況は低い。
- 平成13年度から平成17年度にかけて、複数校合同運動部活動を実施する中学校の数は約3倍に増加。

○運動部活動への外部人材活用状況（国公立中学校）



（出典）文部科学省調べ

○総合運動部活動実施状況（公立学校）

区 分	学校数	所属人数	平均種目数
小学校	1, 416校	74, 071人	3. 3種目
中学校	607校	53, 891人	3. 9種目
高等学校	42校	4, 470人	6. 9種目

（出典）文部科学省調べ（平成16年5月）

○複数校合同運動部活動実施状況（公立学校）

区 分	中学校	高等学校	合計
平成13年度	269校	320校	589校
平成17年度	855校	603校	1, 458校

（出典）文部科学省調べ

平成26年度体力・運動能力調査の結果

○青少年（6～19歳）の新体力テスト合計点の年次比較

各年代の合計点を平成10～26年度（17年間）で比較すると、平成26年度の結果では、小学生（11歳）女子、中学生（13歳）男女、高校生（16歳）男女で過去最高。

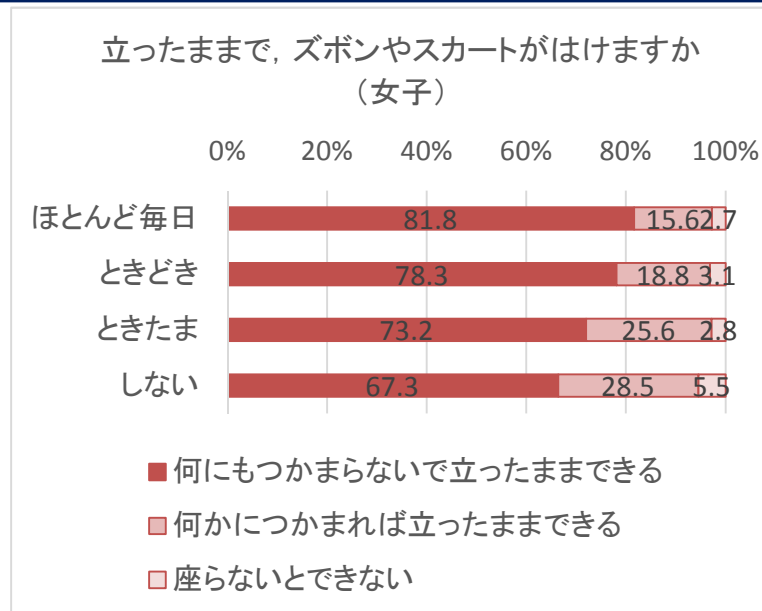
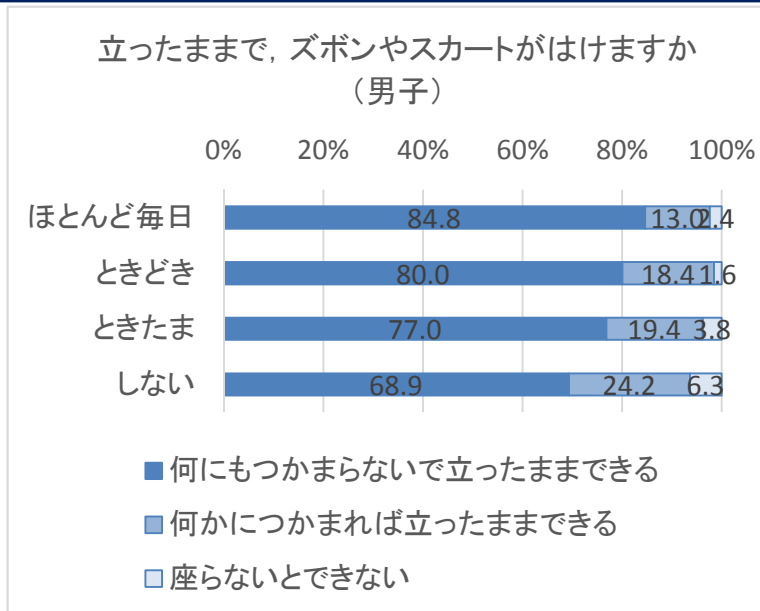
男子	H21	H22	H23	H24	H25	H26
11歳	61.27	62.30	61.01	61.88	60.61	61.45
	5	1	7	2	12	3
13歳	42.89	44.11	44.57	43.86	44.17	44.67
	11	4	2	5	3	1
16歳	54.21	54.89	54.41	54.78	54.67	55.71
	6	2	5	3	4	1

女子	H21	H22	H23	H24	H25	H26
11歳	61.16	61.55	61.59	62.00	61.9	62.07
	7	5	4	2	3	1
13歳	49.58	50.40	51.39	50.58	50.31	51.44
	7	4	2	3	5	1
16歳	50.89	51.82	50.69	50.70	50.12	52.73
	3	2	5	4	8	1

※記録（点）の数値は小数点以下第3位を四捨五入して表記してある。

○高齢者（65～79歳）における日常生活活動とスポーツ・運動習慣

運動やスポーツの実施状況頻度が高い人ほど、日常生活における基本的な活動が維持されている傾向にある。



※ほとんど毎日：週3～4日以上
ときどき：週1～2日程度
ときたま：月1～3日程度

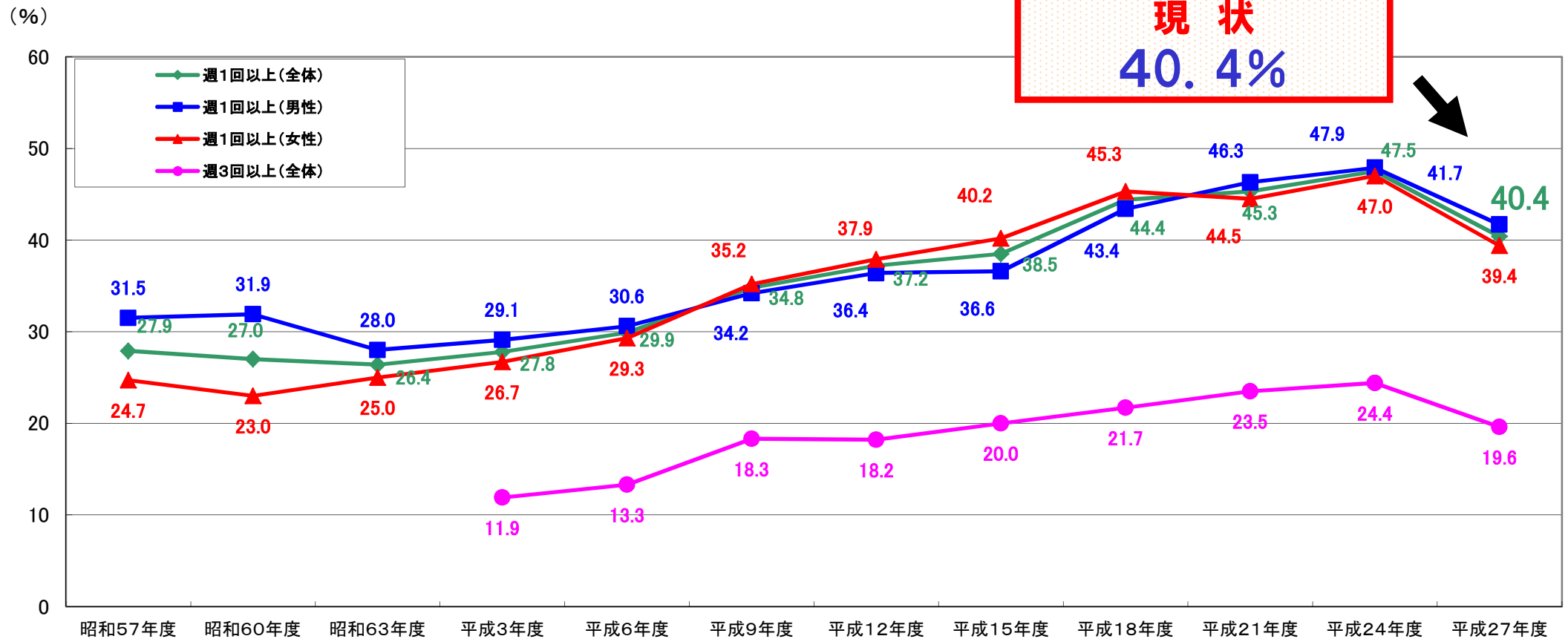
成人の週1回以上運動・スポーツを行う者の割合の推移

○スポーツ基本計画

「できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が3人に2人(65%程度)、週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人(30%程度)となることを目標とする。」

○成人全体のスポーツ実施率*¹(週1回以上)は、この30年向上傾向にあったが、直近の平成27年度調査では前回調査から7.1ポイント減少している。

○障害者(成人)のスポーツ実施率*²(週1回以上)は、18.2%である。(平成25年度)



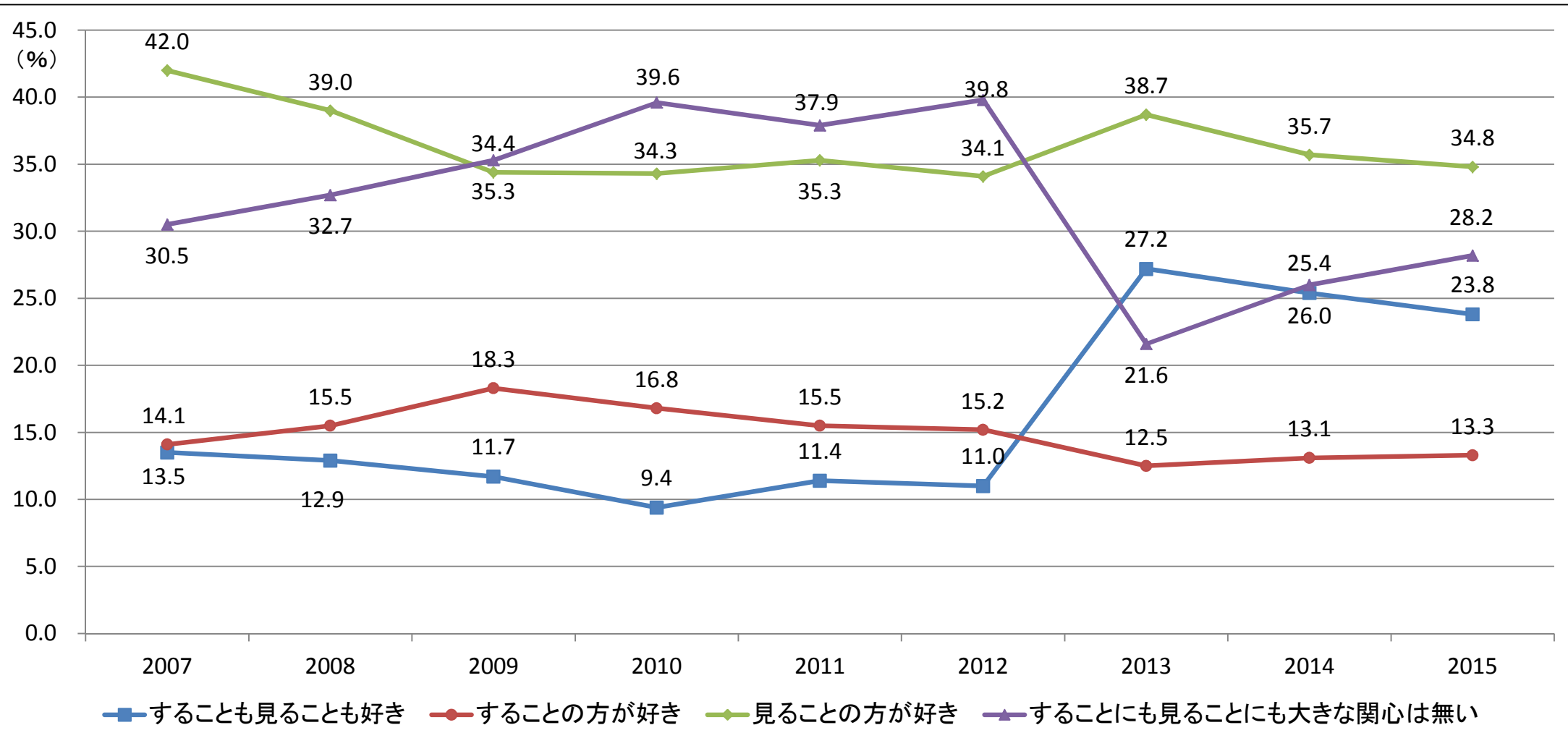
(出典)*1「体力・スポーツに関する世論調査(平成24年度まで)」

及び「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(平成27年度)」に基づく文部科学省推計

*2文部科学省委託事業『健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業(地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)報告書』(平成26年3月 (公財)笹川スポーツ財団)

スポーツへの関心度の推移

スポーツの関心度について、2012年度から2013年度にかけて、「することにも見ることに大きな関心はない」とする者の割合は減少したが、**2014年、2015年度は逆に増加。**「することも見ること好き」とする者の割合も2年連続減少。



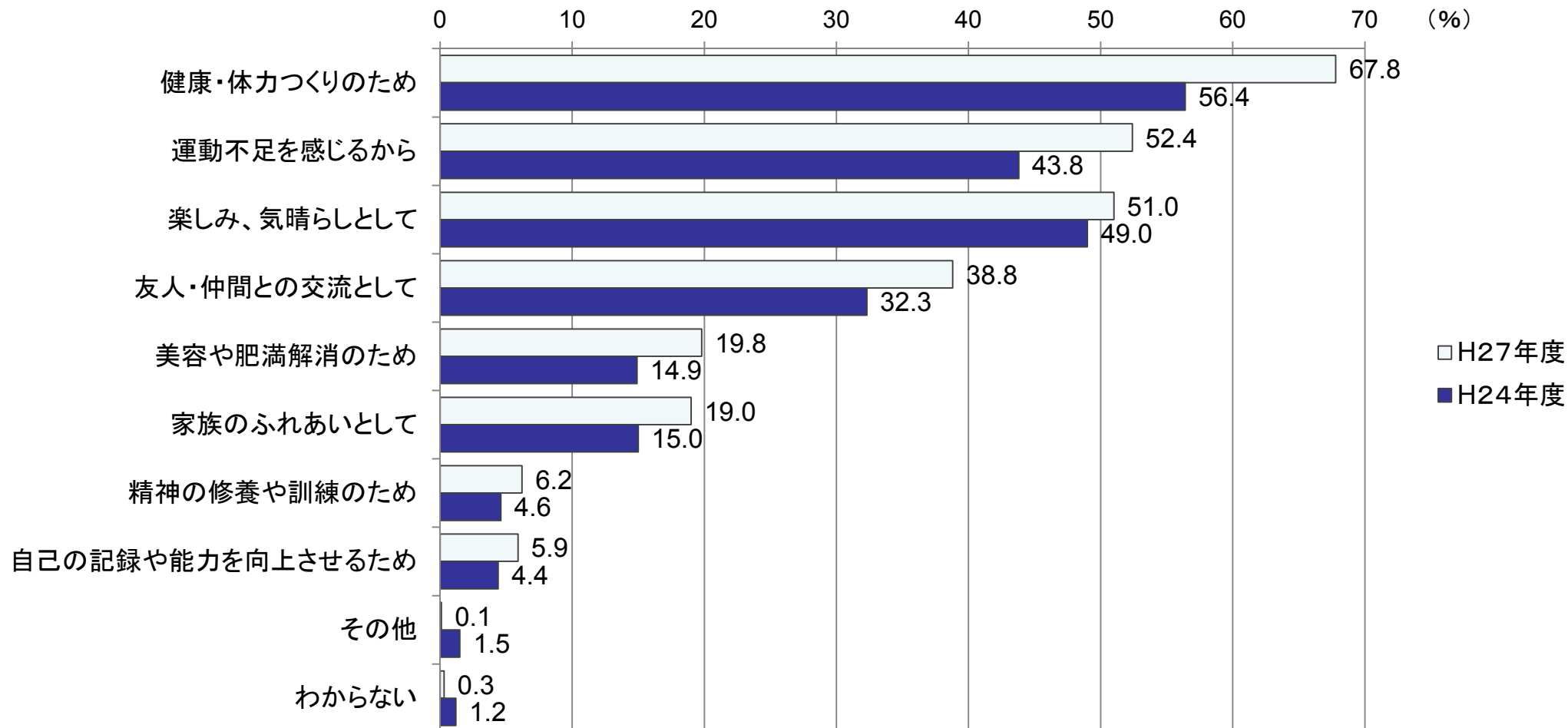
※株式会社マクロミルと三菱UFJリサーチ & コンサルティング株式会社の共同企画「スポーツマーケティング基礎調査」の調査結果に基づく
全国15歳(中学生を除く)～69歳のマクロミルの調査専用パネルに対して実施。
男性2,000名、女性1,000名、計2,000名が対象

(出典)「スポーツマーケティング基礎調査」(2006年～2015年)(株式会社マクロミル)報道資料より文部科学省作成

運動・スポーツを行った理由

運動・スポーツを行った理由は「健康・体力づくりのため」(67.8%)が最も高く、次いで「運動不足を感じるから」(52.4%)、「楽しみ、気晴らしとして」(51.0%)、「友人・仲間との交流として」(38.8%)などがある。

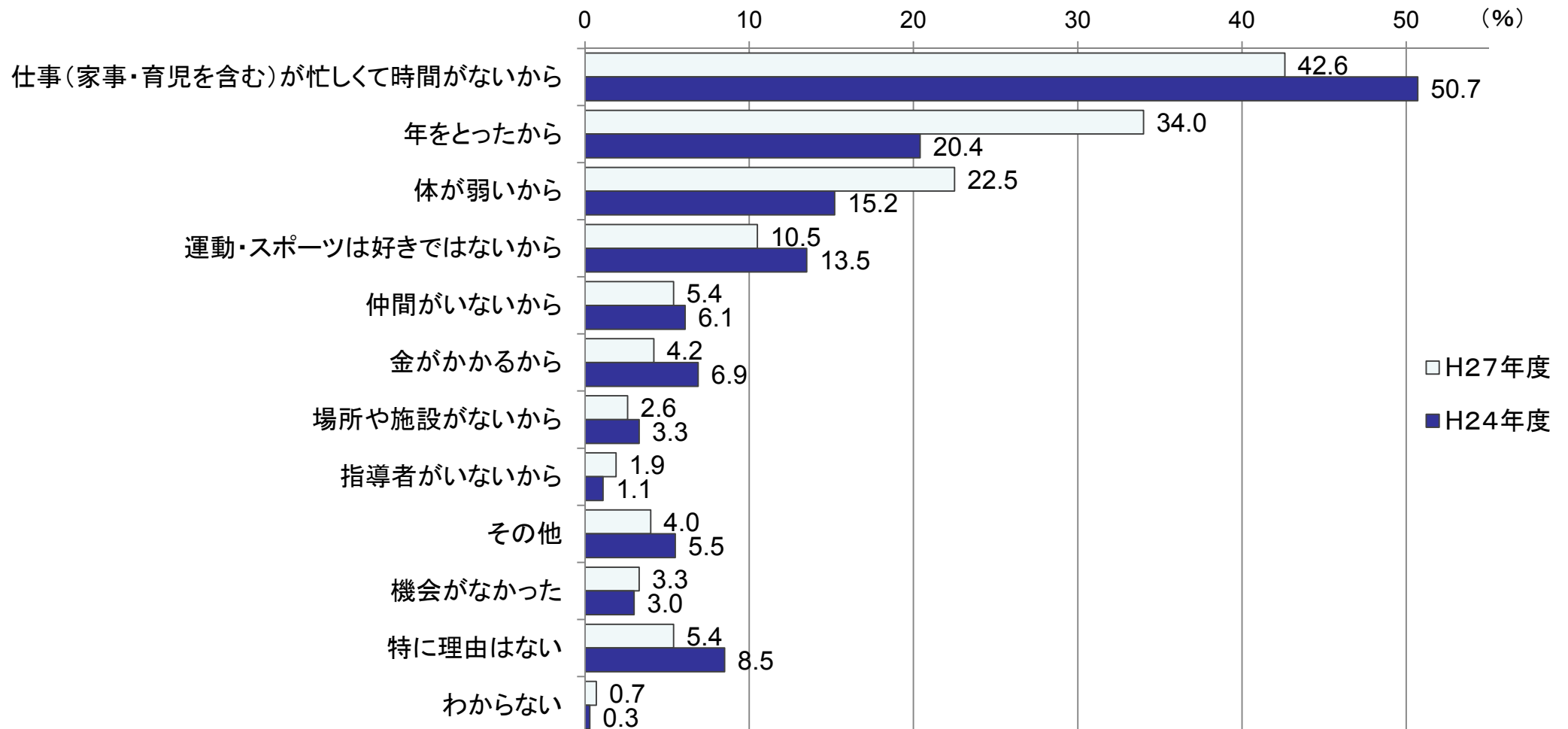
【この1年間に運動やスポーツを行った理由(複数回答可)】



運動・スポーツを行わなかった理由

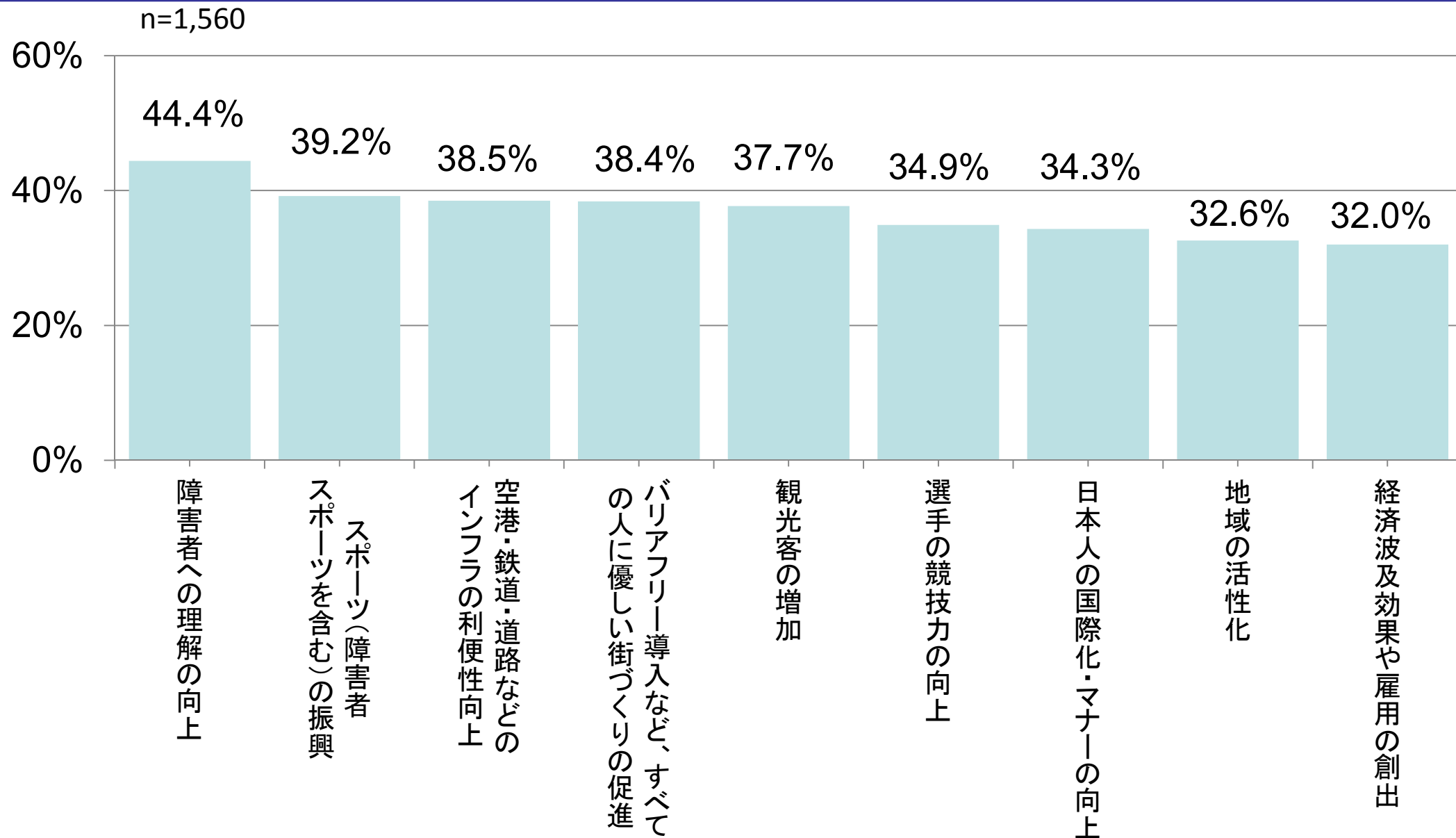
運動・スポーツを行わなかった理由は「仕事(家事・育児を含む)が忙しくて時間がないから」(42.6%)が最も高く、次いで「年をとったから」(34.0%)、「体が弱いから」(22.5%)、「運動・スポーツは好きではないから」(10.5%)などがある。

【この1年間に運動やスポーツを行わなかった理由(複数回答可)】



東京オリンピック・パラリンピックの効果等に関する意識

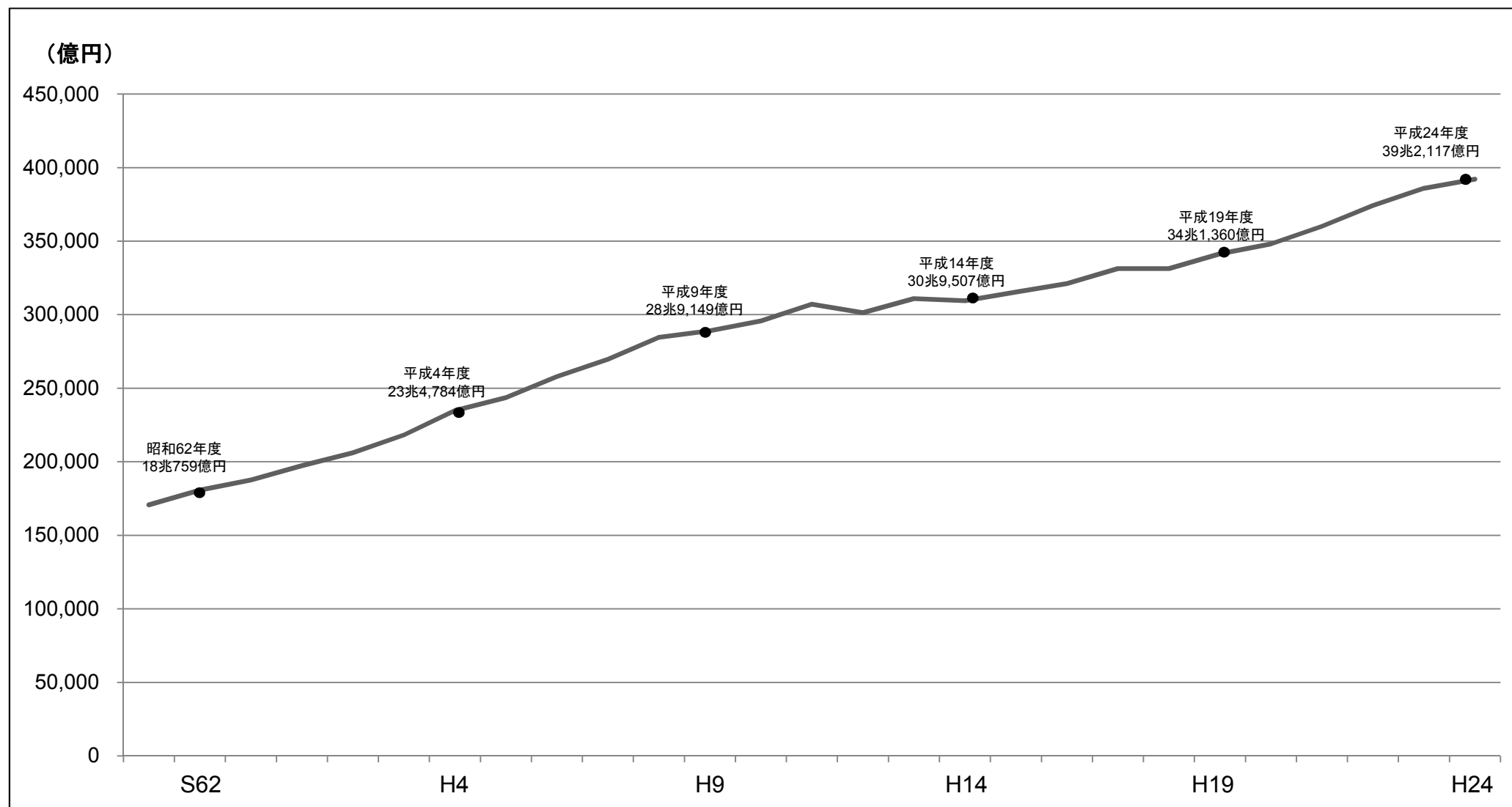
東京オリンピック・パラリンピック開催で期待される効果として最も高い割合を占めているのは障害者への理解の向上であり、他にもバリアフリーの導入が上位に入っているなど、障害者スポーツの振興への期待は高い。



(出典)内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」(平成27年8月)に基づき文部科学省作成

国民医療費の推移

国民医療費は、一貫して増加傾向にあり、平成24年度では39兆2,117億円である。



(出典)厚生労働省「**国民医療費の概況**」に基づき文部科学省作成

【参考】スポーツ基本法（抜粋）

第二条 （基本理念）

スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは人々の権利であることに鑑み、国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的かつ自律的にその適性及び健康状態に応じて行うことができるようにすることを旨として、推進されなければならない。

【参考】スポーツ基本計画（抜粋）

1. 学校と地域における子供のスポーツ機会の充実

政策目標：子どものスポーツ機会の充実を目指し、学校や地域等において、すべての子どもがスポーツを楽しむことができる環境の整備を図る。そうした取組の結果として、今後10年以内に子どもの体力が昭和60年頃の水準を上回ることができるよう、今後5年間、体力の向上傾向が維持され、確実なものとなることを目標とする。

（2）学校の体育に関する活動の充実

施策目標：教員の指導力の向上やスポーツ指導者の活用等による体育・保健体育の授業の充実、運動部活動の活性化等により、学校の教育活動全体を通じて、児童生徒がスポーツの楽しさや喜びを味わえるようにするとともに、体力の向上を図る。